

貯 法：室温保存
 使用期限：ラベル又は外箱に表示

感冒剤

劇薬(ただし、1g分包品は劇薬に該当しない。)

ペレックス[®] 配合顆粒
Pelex[®] combination granule

サリチルアミド・アセトアミノフェン・無水カフェイン・クロルフェニラミンマレイン酸塩配合顆粒剤

	ペレックス配合顆粒
承認番号	22100AMX01012000
薬価収載	2009年9月
販売開始	1967年9月
再評価結果	2014年4月

【 警 告 】

1. 本剤中のアセトアミノフェンにより重篤な肝障害が発現するおそれがあるので注意すること。
2. 本剤とアセトアミノフェンを含む他の薬剤(一般用医薬品を含む)との併用により、アセトアミノフェンの過量投与による重篤な肝障害が発現するおそれがあることから、これらの薬剤との併用を避けること(「過量投与」の項参照)。

【 禁 忌 (次の患者には投与しないこと) 】

1. 本剤の成分又はサリチル酸系製剤(アスピリン等)に対し過敏症の既往歴のある患者
2. 消化性潰瘍の患者[消化性潰瘍が悪化するおそれがある。]
3. アスピリン喘息(非ステロイド性消炎鎮痛剤等による喘息発作の誘発)又はその既往歴のある患者[喘息発作を誘発するおそれがある。]
- *4. 閉塞隅角緑内障の患者[抗コリン作用により眼圧が上昇し、症状を悪化させることがある。]
5. 前立腺肥大等、下部尿路に閉塞性疾患のある患者[抗コリン作用により排尿障害が悪化するおそれがある。]
6. 重篤な肝障害のある患者[本剤中のアセトアミノフェンにより肝障害が悪化するおそれがある。]

【 組 成 ・ 性 状 】

販 売 名	ペレックス配合顆粒
成分・含量	1g中 サリチルアミド 270mg アセトアミノフェン 150mg 無水カフェイン 30mg クロルフェニラミンマレイン酸塩 3mg
添 加 物	乳糖水和物、精製白糖、トウモロコシデンプン、ヒドロキシプロピルセルロース
性 状	白色の顆粒剤である。

【 効 能 ・ 効 果 】

感冒もしくは上気道炎に伴う下記症状の改善及び緩和
 鼻汁、鼻閉、咽・喉頭痛、咳、痰、頭痛、関節痛、筋肉痛、発熱

【 用 法 ・ 用 量 】

通常、成人1回1gを1日3～4回経口投与する。
 なお、年齢、症状により適宜増減する。

【 使 用 上 の 注 意 】

1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること)
 - (1)肝障害又は腎障害のある患者[アセトアミノフェンの代謝が遅延し、これらの障害が悪化するおそれがある。]
 - (2)出血傾向のある患者[血小板機能異常があらわれ、出血傾

向が悪化するおそれがある。]

- (3)気管支喘息の患者[喘息発作を誘発するおそれがある。]
- (4)アルコール多量常飲者[肝障害があらわれやすくなる。](「相互作用」の項参照)
- (5)絶食・低栄養状態・摂食障害等によるグルタチオン欠乏、脱水症状のある患者[肝障害があらわれやすくなる。]
- * (6)開放隅角緑内障の患者[抗コリン作用により眼圧が上昇し、症状を悪化させることがある。]

2. 重要な基本的注意

- (1)サリチル酸系製剤の使用実態は我が国と異なるものの、米国においてサリチル酸系製剤とライ症候群との関連性を示す疫学調査報告があるので、本剤を15歳未満の水痘、インフルエンザの患者に投与しないことを原則とするが、やむを得ず投与する場合には、慎重に投与し、投与後の患者の状態を十分に観察すること。[ライ症候群：小児において極めてまれに水痘、インフルエンザ等のウイルス性疾患の先行後、激しい嘔吐、意識障害、痙攣(急性脳浮腫)と肝臓ほか諸臓器の脂肪沈着、ミトコンドリア変形、AST(GOT)・ALT(GPT)・LDH・CK(CPK)の急激な上昇、高アンモニア血症、低プロトロンビン血症、低血糖等の症状が短期間に発現する高死亡率の病態である。]
- (2)眠気を催すことがあるので、本剤投与中の患者には自動車の運転等、危険を伴う機械の操作に従事させないように十分に注意すること。

3. 相互作用

併用注意(併用に注意すること)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
クマリン系抗凝血剤 ワルファリン	クマリン系抗凝血剤の作用が増強されることがあるので、減量するなど慎重に投与すること。	サリチル酸系製剤(アスピリン等)は血小板凝集抑制作用、消化管刺激による出血作用を有する。また、血漿蛋白に結合したクマリン系抗凝血剤と置換し、これらの薬剤を遊離させる。
糖尿病用剤 インスリン製剤 トルブタミド	糖尿病用剤の作用が増強されることがあるので、減量するなど慎重に投与すること。	サリチル酸系製剤(アスピリン等)は血漿蛋白に結合した糖尿病用剤と置換し、これらの薬剤を遊離させる。
中枢神経抑制剤	相互に中枢神経抑制作用が増強されることがあるので、減量するなど慎重に投与すること。	クロルフェニラミンマレイン酸塩は中枢神経抑制作用を有する。

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
アルコール	1)相互に中枢神経抑制作用が増強されることがあるので、減量するなど慎重に投与すること。 2)アルコール多量常飲者がアセトアミノフェンを服用したところ肝不全を起こしたとの報告がある。	1)クロルフェニラミンマレイン酸塩は中枢神経抑制作用を有する。 2)アルコールによりアセトアミノフェンから肝毒性を持つN-アセチル-p-ベンゾキノインミンへの代謝が促進される。
MAO阻害剤	相互に作用が増強されることがあるので、減量するなど慎重に投与すること。	クロルフェニラミンマレイン酸塩の抗コリン作用が増強されると考えられている。

4. 副作用

文献等を集計した結果、副作用評価可能例数は386例(小児用ペレックス配合顆粒155例を含む)であり、副作用発現率は11.1%(43件)であった。主な副作用は食欲不振3.1%、胃部不快感2.8%、眠気1.3%であった。[再評価結果]^{1)~8)}

(1)重大な副作用[発現頻度は不明。]

- ※※1) ショック、アナフィラキシー：ショック、アナフィラキシー(呼吸困難、全身潮紅、血管浮腫、蕁麻疹等)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 2) 中毒性表皮壊死融解症(Toxic Epidermal Necrolysis: TEN)、皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson症候群)、急性汎発性発疹性膿疱症、剥脱性皮膚炎：中毒性表皮壊死融解症、皮膚粘膜眼症候群、急性汎発性発疹性膿疱症、剥脱性皮膚炎があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 3) 再生不良性貧血、無顆粒球症：再生不良性貧血、無顆粒球症があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 4) 喘息発作の誘発：喘息発作を誘発することがある。
- 5) 間質性肺炎：発熱、咳嗽、呼吸困難、胸部X線異常、好酸球増多を伴う間質性肺炎があらわれることがあるので、このような症状があらわれた場合には投与を中止し、副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。
- 6) 劇症肝炎、肝機能障害、黄疸：劇症肝炎、AST(GOT)、ALT(GPT)、 γ -GTPの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- ※※7) 間質性腎炎、急性腎障害：間質性腎炎、急性腎障害があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 8) 横紋筋融解症：筋肉痛、脱力感、CK(CPK)上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇を特徴とする横紋筋融解症があらわれることがあるので、このような症状があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

(2)その他の副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には減量、休薬など適切な処置を行うこと。なお、過敏症があらわれた場合には投与を中止すること。

分類	頻度	0.1~5%未満	頻度不明
過敏症	発疹		浮腫、鼻炎様症状、結膜炎
血液			血小板減少、貧血、チアノーゼ

分類	頻度	0.1~5%未満	頻度不明
消化器		食欲不振、胃部不快感、悪心・嘔吐、下痢、便秘	胸やけ、胃痛、口渇、消化管出血
神経系	眠気		耳鳴、難聴、めまい、頭痛、興奮、神経過敏、焦躁感、複視
肝臓			肝障害
腎臓			腎障害
泌尿器			多尿、排尿困難
その他	心悸亢進		過呼吸、代謝性アシドーシス ^{注1)}

注1) 過呼吸、代謝性アシドーシス等があらわれた場合には血中濃度が著しく上昇していることが考えられるので、このような場合には減量又は投与を中止すること。

5. 高齢者への投与

一般に高齢者では生理機能が低下しているため、減量するなど注意すること。

6. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与

※※(1)妊婦又は妊娠している可能性のある女性には治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。投与する際には、必要最小限にとどめ、適宜羊水量を確認するなど慎重に投与すること。シクロオキシゲナーゼ阻害剤(経口剤、坐剤)を妊婦に使用し、胎児の腎機能障害及び尿量減少、それに伴う羊水過少症が起きたとの報告がある。[サリチル酸系製剤(アスピリン等)の動物実験(ラット)で催奇形作用が、また、ヒトで妊娠後期に投与された患者及びその新生児に出血異常があらわれたとの報告がある。^{9)~17)}

※※(2)妊娠後期の女性へのアセトアミノフェンの投与により胎児に動脈管収縮を起こすことがある。^{18)~20)}

(3)アセトアミノフェンを妊娠後期のラットに投与した実験で、弱い胎児の動脈管収縮が報告されている。²¹⁾

(4)授乳婦には長期連用を避けること。[カフェインは母乳中に容易に移行する。^{22,23)}

7. 過量投与

(1)アセトアミノフェンの過量投与により、肝臓・腎臓・心筋の壊死(初期症状：悪心、嘔吐、発汗、全身倦怠感等)が起こったとの報告がある。^{24)~28)}

(2)総合感冒剤や解熱鎮痛剤等の配合剤には、アセトアミノフェンを含むものがあり、本剤とアセトアミノフェン又はその配合剤との偶発的な併用により、アセトアミノフェンの過量投与による重篤な肝障害が発現するおそれがある。

(3)アセトアミノフェン過量投与時の解毒(肝障害の軽減等)には、アセチルシステインの投与を考慮すること。

8. その他の注意

(1)腎盂及び膀胱腫瘍の患者を調査したところ、アセトアミノフェンの類似化合物(フェナセチン)製剤を長期・大量に使用(例：総服用量1.5~27kg、服用期間4~30年)していた人が多いとの報告がある。^{29)~31)}また、アセトアミノフェンの類似化合物(フェナセチン)を長期・大量投与した動物実験(マウス、ラット)で、腫瘍発生が認められたとの報告がある。³²⁾

(2)アセトアミノフェンの類似化合物(フェナセチン)の長期投与により、血色素異常を起こすことがあるので、長期投与を避けること。

(3)非ステロイド性消炎鎮痛剤を長期間投与されている女性において、一時的な不妊が認められたとの報告がある。

【 臨 床 成 績 】

1. ペレックス配合顆粒¹⁻⁷⁾

ペレックス配合顆粒の臨床試験の成績を集計した結果、有効率は80.2% (182/227例)であり、二重盲検比較試験においてもPlacebo群との間に有意な差が認められた。

また、ペレックス配合顆粒からクロルフェニラミンマレイン酸塩を除いた群との二重盲検比較試験において、特に鼻汁、鼻閉、痰の症状において差が認められた。

2. 小児用ペレックス配合顆粒(ペレックス配合顆粒の $\frac{1}{6}$ 量)⁸⁾

小児用ペレックス配合顆粒の臨床試験の成績を集計した結果、有効率は76.8% (119/155例)であった。

【 薬 効 薬 理 】

サリチルアミド及びアセトアミノフェンは中枢性放熱促進による解熱作用、中枢性(疼痛閾値)あるいは末梢性(浮腫)抑制等による鎮痛作用があり、また、クロルフェニラミンマレイン酸塩はアレルギーや炎症反応に関与するヒスタミンに拮抗的に作用するとされている。³³⁾ ペレックス配合顆粒はこれにカフェインを配合した感冒剤であり、サリチルアミドとアセトアミノフェンの併用による相乗効果(マウス)、更にカフェインとクロルフェニラミンマレイン酸塩配合による効果増強(マウス、ヒト)が確認されている。^{1,34)}

【有効成分に関する理化学的知見】

成分名	サリチルアミド	アセトアミノフェン	無水カフェイン	クロルフェニラミンマレイン酸塩
構造式				
一般名	サリチルアミド (Salicylamide)	アセトアミノフェン (Acetaminophen)	無水カフェイン (Anhydrous Caffeine)	クロルフェニラミンマレイン酸塩 (Chlorpheniramine Maleate)
化学名	2-Hydroxybenzamide	N-(4-Hydroxyphenyl)-acetamide	1,3,7-Trimethyl-1H-purine-2,6 (3H,7H)-dione	(3R)-3-(4-Chlorophenyl)-N,N-dimethyl-3-pyridin-2-ylpropylamine monomaleate
分子式	C ₇ H ₇ NO ₂	C ₈ H ₉ NO ₂	C ₈ H ₁₀ N ₄ O ₂	C ₁₆ H ₁₉ ClN ₂ · C ₄ H ₄ O ₄
分子量	137.14	151.16	194.19	390.86
融点	139~143℃	169~172℃	235~238℃	130~135℃
性状	白色の結晶又は結晶性の粉末で、におい及び味はない。 N,N-ジメチルホルムアミドに極めて溶けやすく、エタノール(95)に溶けやすく、プロピレングリコールにやや溶けやすく、ジエチルエーテルにやや溶けにくく、水又はクロロホルムに溶けにくい。水酸化ナトリウム試液に溶ける。	白色の結晶又は結晶性の粉末である。メタノール又はエタノール(95)に溶けやすく、水にやや溶けにくく、ジエチルエーテルに極めて溶けにくい。水酸化ナトリウム試液に溶ける。	白色の結晶又は粉末で、においはなく、味は苦い。クロロホルムに溶けやすく、水、無水酢酸又は酢酸(100)にやや溶けにくく、エタノール(95)又はジエチルエーテルに溶けにくい。1.0gを水100mLに溶かした液のpHは5.5~6.5である。	白色の微細な結晶である。酢酸(100)に極めて溶けやすく、水又はメタノールに溶けやすく、エタノール(99.5)にやや溶けやすい。希塩酸に溶ける。水溶液(1→20)は旋光性を示さない。

【 包 装 】

ヒートシール：1g×1000包、1g×2000包

バラ包装：500g、5kg

【主要文献及び文献請求先】

1. 主要文献

- 1) 小沢正人 他：臨牀と研究, 55 (2) 586 (1978)
- 2) 綾部長徳：新薬と臨牀, 25 (11) 1975 (1976)
- 3) 辰口益三：基礎と臨牀, 11 (2) 633 (1977)
- 4) 浅子由己：基礎と臨牀, 11 (2) 636 (1977)
- 5) 江頭洋祐：新薬と臨牀, 26 (4) 791 (1977)
- 6) 河村信治 他：新薬と臨牀, 26 (5) 993 (1977)
- 7) 赤松春義：新薬と臨牀, 26 (5) 996 (1977)
- 8) 中村泰郎：新薬と臨牀, 26 (8) 1586 (1977)
- 9) Larsson, K. S. et al. : Acta Paediat. Scand., 54 43 (1965)
- 10) Eriksson, M. : Acta Path. Microbiol. Scand., 76 164 (1969)
- 11) Lansdown, A. B. G. : Food Cosmet. Toxicol., 8 647 (1970)
- 12) Eriksson, M. : Acta Paediat. Scand., 59 517 (1970)
- 13) Eriksson, M. : Acta Pharmacol. Toxicol., 29 241 (1971)
- 14) Eriksson, M. : Acta Pharmacol. Toxicol., 29 250 (1971)
- 15) Tanaka, S. et al. : 先天異常, 13 (2) 73 (1973)
- 16) Tagashira, E. et al. : Jpn. J. Pharmacol., 31 (4) 563 (1981)
- 17) Stuart, M. J. et al. : New Engl. J. Med., 307 (15) 909 (1982)
- 18) 西原正泰 他：和歌山医学, 56 (2) 121 (2005)
- 19) 平川健一郎 他：日本未熟児新生児学会雑誌, 22 (3) 601 (2010)
- 20) 松沢麻衣子 他：日本未熟児新生児学会雑誌, 22 (3) 602 (2010)
- 21) 門間和夫 他：小児科の進歩, 2 95 (1983)
- 22) Bailey, D. N. et al. : J. Analyt. Toxicol., 6 64 (1982)
- 23) Schilf, E. et al. : Arch. Gynaekol., 134 201 (1928)
- 24) Davidson, D. G. D. et al. : Br. Med. J., 2 (5512) 497 (1966)
- 25) Krikler, D. M. : Br. Med. J., 2 (5552) 615 (1967)
- 26) Proudfoot, A. T. et al. : Br. Med. J., 3 (5722) 557 (1970)
- 27) Edwards, O. M. et al. : Br. Med. J., 2 (5753) 87 (1971)
- 28) Will, E. J. et al. : Br. Med. J., 4 (5784) 430 (1971)
- 29) Taylor, J. S. et al. : Med. J. Aust., 1 (9) 407 (1972)
- 30) Leistenschneider, W. et al. : Schweiz. Med. Wschr., 103 (12) 433 (1973)
- 31) Johansson, S. et al. : Cancer, 33 (3) 743 (1974)
- 32) 井坂英彦：厚生省がん研究助成金による研究報告集(昭和52年度), pp. 751-753 (1978)
- 33) 島本暉朗 他：薬理学, pp. 151-167, 471-479, 医学書院, 東京 (1968)
- 34) 亀山勉 他：応用薬理, 13 (6) 845 (1977)

2. 文献請求先

大鵬薬品工業株式会社 医薬品情報課
〒101-8444 東京都千代田区神田錦町1-27
TEL 0120-20-4527 FAX 03-3293-2451